

主 題：一番すぐれているのは愛 ④

聖書箇所：コリント人への手紙第一 13章8-13節

I コリント13：8をお開きください。パウロはこの13章の中に“愛”について記していました。

A. 「愛（アガペー）の価値」 1-3節

1-3節では、この神の愛がどれほど大切なのかということ、神の愛であるアガペーの価値について教えました。

B. 「愛（アガペー）の実体」 4-7節

4-7節にはその実体について、愛というのは行動が伴うものだとパウロは教えてくれました。

このコリント教会の中には霊的賜物自体を誇っている者たちがいました。どんな賜物を得ているのか、それらをどれだけ得ているのか。なぜこんなことに関心を払ったかと言うと、それがこの人々の霊性を測る基準だったからです。どんな賜物を持っているのか、どれだけ持っているのかによって、人々の霊性を測ったのです。そこでパウロは、どんな霊的賜物を得ようと、どれだけそれらを得ていたとしても、それよりもはるかに優れているものがあるのだ、それが愛だと教えるのです。

C. 「愛の至上さ」 8-13節

8-13節には、愛の至上さをパウロは記しています。愛が最も大切だ、それがパウロが教えたメッセージでした。

1. 愛の永遠性 8a節

8節「愛は決して絶えることはありません。」とあります。絶対に次のことは起こらないのだと否定するのです。この「絶える」ということばは「とまる」とか「消え去る」、「朽ち果てる」、「終わらせる」という意味があります。このことばはちょうど花びらや木の葉が枯れて地面に落ちることを意味するのです。いつまでも美しさを保っていないのです。いつかそれが地面に落ちる時がやって来ると。しかし、「愛」はしぼんだり枯れたりしなびて地面に落ちることが絶対にないのだというのがパウロのメッセージです。決して「愛」は絶えない。なぜなら「愛」は永遠に続くものだからです。

なぜ「愛」が永遠なのか、その理由は神が永遠だからです。私たちはこのみことばを通して神とはどんなお方であるかを教えられています。少なくとも私たちが知っているのは、神は「愛」です。神が永遠に存在されるお方である以上、「愛」も永遠に続きます。このことはまたパウロが最後の13節で改めて教えます。

2. 期限付きの賜物 8b-12節

パウロはこの「愛」が永遠に続くものであると8節の初めに教えた後、そうでないもの、永遠ではなくて、期限がついているものについて後半から教えています。

1) 永遠でない賜物 8b節

「預言の賜物ならばすたれます。異言ならばやみます。知識ならばすたれます。」とあります。まず新改訳の第2版には「預言の賜物ならばすたれます」と書かれていますが、欄外に「賜物は補足」とあります。確かに原語の中には「賜物」ということばはありません。ですから2017年版にはこの「賜物」ということばを外しています。でもいずれにせよ言っているメッセージは変わらないのです。

「預言」というのは何かをもう一度思い出してください。これは神と神様のみこころについての真理を述べることです。神とはこういう方ですとか、神のみこころはこうだという真理を述べるのが「預言」です。また同時に「預言」というと、真っ先に皆さんの頭の中に浮かんでくるのは将来のこと、これから何が起こるかを告げることでもあります。パウロはその「預言」はすたれるのだと言います。

次に「知識」というのは神の真理を知ることです。神様の真理を内に蓄え、それを理解して、それを知ることです。それを頭に入れながら、皆さんに見ていただきたいのは二つの動詞です。8節のところに「すたれ」ということばと「やむ」ということばが出ています。「預言の賜物ならばすたれ」とあって、「異言ならばやむ」、また「知識ならばすたれ」と書いてあります。我々が考えるのはなぜこんなふうにことばを使い分けたのかということです。パウロは当然目的を持ってこのことばを使い分けています。ではどういう意味を持ったことばが使われているのかというと、まず最初に出ている「すたれ」ということばは、13章の中に4回も出てきています。これは「活動しないようにする」とか、「効果や効力をなくす」という意味です。パウロはそれらが活動をやめる、必ず終わりが来ると言っているのです。

10節に「完全なものが現われたら、不完全なものはすたれます。」と、また「すたれ」ということばが出ています。当然この8節と10節が関連していることは言うまでもありません。パウロは、「預言の賜物」であっても「知識」であったとしても、これらは「完全なものが現われたら」すたれてしまう、その時に終わ

りを迎え、その時に効力を、効果をなくすのだと教えます。

「異言ならばやみます」と続きます。この「やむ」という動詞は「終わる」とか「やめる」とか、細かい文法的な説明はしませんけれども、この動詞が使われている態、つまり能動態や受動態というのを皆さんお聞きになると思いますが、ギリシャ語の中には中態というのがあって、それをあえてここで使っています。なぜこんな態を使ったかという、この文章の主語は「異言」ですけれども、「異言」自体の行動をあえてパウロは挙げようとしているのです。誰かからではなくて「異言」自体がこういうふうにならなくていくのだと、この働きはやんでいくのだということを読者たちに教えるのです。ですから「異言」自体がみずからの活動をやめるとか、「異言」の活動が自動的にやんでいくという意味を持った使われ方をしています。

聖書の中を見る時に、実際に十二使徒たちが活躍していた使徒たちの時代以降、確かに「異言」はほとんど使われていません。もちろん「異言」だけではなくて、さまざまな印を伴った賜物がそれぞれの働きをやめています。どんなものがあるかという、奇蹟を行う賜物やいやしの賜物、これはIコリント12：28にもそのようなことが記されています。つまりみことばを見た時に神様はいろいろな賜物を与えられたけれども、その賜物のすべてが永遠に続くものではなく、その働きを終えていくものもある。特に「異言」はその働きをみずからが終える時がやってくるのだと。そして今お話したように、奇蹟を行う者やいやしの賜物にしても今現在そういう賜物を持っている人はいないのです。もちろんそういう賜物をいただいていると言う人がいないわけではありません。でももしそういう賜物がこの使徒の時代と同じように与えられているとしたら、今そういう人たちはこの世の中のヒーローになります。これだけ病が蔓延していろいろな不安があるのだから、そういう人はそこへ出かけて行って助けなければいけない。でもそういう働きを実際になすことができる人はどこにもいない。ただ神は変わっておられない以上、神様はそういう奇蹟を行うことはたやすいです。どんな奇蹟であっても、たとえ死んだ人がその死からよみがえることであつたとしても、神である以上それをなすことができる。でも賜物に関して言うならば、そういう賜物を今現在与えられている人は存在しないのです。

パウロはここで「預言」と「知識」、そして「異言」について話をするのです。ジョン・マッカーサー先生は「新約聖書に記録された最後の奇蹟は神が人を介して直接的に働いたというもので、それは紀元58年ごろに起こった。」と書いておられます。それは使徒28：8に「たまたまポプリオの父が、熱病と下痢とで床に着いていた。そこでパウロは、その人のもとに行き、祈ってから、彼の上に手を置いて直してやった。」とあります。それ以降こういった特別な奇蹟というものは記されていない。いずれにしろ私たちがこのテキストから教えられることは、賜物もあることを除いて永続するものはないのだ、みんな終わるのだということです。それぞれに目的があって、その目的が達成されればそれは終わるのです。ですからパウロはここで「愛」は決して終わることはないけれども、そうでない賜物は終わりを迎えることがあると教えます。

2) 永遠でない理由 9-12節

ではこうして「預言」や「異言」、「知識」というものが永続しないことを教えたパウロは、その理由について説明します。9節は「**というのは**」ということばで始まって、「**私たちの知っているところは一部分であり、預言することも一部分だからです。**」と続きます。パウロはここで、どうしてこういう「預言」や「知識」という賜物が永続しないのかという理由を説明するのです。

(1) 「不完全だから」 9-10節 ローマ11：33-34、Iコリント8：2、詩篇145：3

一つ目がここに書いてあります。それは「**不完全**」だからと言うのです。我々の知っているところ、我々の「**預言**」、どちらも「**不完全**」だと言うのです。なぜかという、例えば私たちは神様のことを知っているといっても非常に限定されたことに尽きます。我々の一体だれが神様のことについてすべてを知っています？我々が知っているのはごくわずかでしかないのです。きのう私のところに、私の神学校時代の教授が86歳で天に召されたというメールが来ていました。この先生は神学校に行く時に、教会のみんなに「私は聖書をマスターして来ます」と言われたとご本人が言っておられました。神学校に行って博士号を取り、また別の神学校に行って博士号を取って、私たちの神学校で教えておられたのですが、そのような学位を取って一般的に見れば本当に大変な知識を持っておられるその先生が、まだ私は神について入口を入ったところですよと言っておられました。残念ながら私たちは、余りにも深過ぎて神についてそのすべてを知ることはない。ですからパウロは、我々が知っていると言っても知っていることはごく一部でしかない、つまり私たちは「**不完全**」なのだと言うのです。

パウロがローマ11：33で「**ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。**」と言っています。だから我々はそのすべてを知ることはできないと。詩篇145：3にも「**主は大いなる方。大いに賛美されるべき方。その偉大さを測り知ることができません。**」とあります。もう説明するまでもないですよ？神のことを知ろうとしても余りにも深過ぎて、まだ私たちは入口にしか立っていないと。知っても

知っても私たちはそのすべてを知ることにはない。そのようなお方である、それが聖書の教える神です。パウロは神様の真理を人々に明らかにする賜物、「預言」についても同じことを言います。我々はその真理のすべてを知っていないゆえに、我々が語ったとしてもそれはわずかごく一部でしかないという話です。また、預言者が先のことを語ったとしてもすべてのことを知っていないから、語ることはごくわずかでしかないと言うのです。ですからこうしてパウロは「知識」と「預言」の「不完全」さを指摘し、それらは「完全なものが現われたら、不完全なものはすたれ」るのだと10節で教えるのです。今お話ししてきたように、私たちの「知識」も完全ではありませんでした。すべての真理を知っていたわけではありません。「預言」の賜物においても同様であって、神様の真理を語るという賜物をいただいていたとしても、神のみこころのすべてを知っていたわけではありません。はっきり言えば我々はそのすべてを知ることには不可能だということです。そこでパウロは、「完全なものが現われたら」その必要性がなくなるのだと言うのです。

8節には「預言」、「知識」、「異言」と書かれていました。でも9節になると、今度は「知っている」、つまり「知識」と「預言」のことしか記されていない。ここに「異言」がないのです。なぜパウロはここから「異言」を除いたのかというと、この「知識」と「預言」という二つの賜物に関しては、「完全なものが現われた」ならばすたれる。でも「異言」は「完全なものが現われ」るよりもっと前にやんでしまうからです。同じ時になくなるのではないのです。なくなる時期が違うからです。ですからあえてパウロはここで「完全なものが現われ」た時に「不完全なものはすたれ」る。その「不完全なもの」は「知識」であり「預言」なのです。「異言」はそれよりもっと早くなくなるものだと言うのです。

◎ 「完全なものが現われた」時とは？

さて「完全なものが現われたら、不完全なものはすたれます。」と書かれています。それは一体何を言っているのかです。この「完全なもの」ということばは、確かに「完全」、また「完璧なもの」ということです。それが「現われた」、それが「来る」ということです。そういう意味を持ったことばが使われているのですが、例えば私たちが「完全なものが現われ」という今はまだ来ていないけど将来現れるということを書こうとしたら、普通だったら当然未来形を使うでしょう？でもここは未来形を使わず不定過去という時制を使っています。なぜこんなふうにするのかというと、これは絶対確実に起こること、その確実性を強調するためにあえてもうそれが既に起こったかのように記しているのです。ですからパウロが言いたいのは、「完全なもの」は間違いなく確実に訪れるのだ、やって来るのだということです。その時に何が起こるのか、「不完全なものは」と。

ではその「不完全なもの」というのは確かに不完全、不十分なものです。「すたれ」ていくというのは活動しないようになっていくということでした。「完全なものが現われた」時に効果とか効力をなくしてしまうという話です。

ではこの「完全なものが現われた」時とはどんな時なのか——。一体パウロは何の話をしているのかです。四つの可能性があります。

① 「みことばの完成？」

一つ目は聖書の完成の話です。聖書が完成する時、まだこの時は聖書のことばがすべて完成していません。旧約聖書と新約聖書が66の本にまとめられるのですが、完成した神の啓示、神のメッセージ、この聖書が完成したら、今見てきた「知識」や「預言の賜物」は活動をやめてしまう。効果や効力をなくす。果たしてそう言っているかどうかです。聖書が完成した後も、聖書の真理を解き明かす者たちが存在しています。「預言」をする人々、神様の真理を伝える者たちがいたのです。ということ考えた時に、聖書が完成した時にこういった賜物はなくなると判断することは難しいです。それ以降にも存在していたという事実がそれを否定するのです。

② 「空中再臨？」 黙示録11:3

ある人々はこれは空中再臨ではないかと言います。イエス様が戻って来られて我々クリスチャンが主のもとに引き上げられる、その時をもってこういう賜物はその役割を終えるのではないかと。でも患難時代の出来事がみことばの中に記されています。患難時代の神様が何をなさるかということ、預言者を送られ、神の真理を語り続けるのです。ということであれば、空中携挙、空中再臨でもってこの「不完全なもの」がすたれるとは言えません。なぜなら空中再臨の後も地上にあって「預言」の働きが継続するからです。

③ 「地上再臨？」 イザヤ11:9 (千年王国)、イザヤ66:19

三つ目に考えられるのは、イエス様がイエス様を信じた人々と地上に戻って来るという地上再臨です。地上再臨でイエス様とともに我々もこの地上に帰って来る。その後千年の間イエス様を王とする千年王国が続くと黙示録20章に記されています。その千年王国においても人々は神の真理を語り、教え続けるのです。人々はキリストの救いを宣べ伝え続けるのです。イザヤはイザヤ書11:9で「主を知ること

が、海をおおう水のように、地を満たすからである。」と言っています。つまり主を知る人々がふやされるという話です。一体いつそんなことが起こるかという、千年王国の時です。千年王国に今のちょうど私たちと同じように肉を持って入っていく人々がいます。患難時代に救われ、患難時代の迫害を逃れて生き延びた人たちがそのまま千年王国に入っていく。彼らは今と同じように子どもたちを生み、生活をするのです。当然彼らには救いが必要になります。ですから千年王国でもキリストの救いのメッセージが、福音のメッセージが語り続けられていくのです。

イザヤ書66：19にも信じたイスラエル人たちが世界中に出て行って、異邦人に福音を語ることが記されています。「わたしは彼らの中にしるしを置き、彼らのうちののがれた者たちを諸国に遣わす。すなわち、タルシシュ、プル、弓を引く者ルデ、トバル、ヤワン、遠い島々に。これらはわたしのうわさを聞いたこともなく、わたしの栄光を見たこともない。彼らはわたしの栄光を諸国の民に告げ知らせよう。」（新改訳第3版）と。今の時代において私たちはイエス・キリストの福音を伝えます。確かに患難時代の初めにはすべてのクリスチャンはいません。キリストの元に引き上げられるから。でもそこに神様は救われる者たちをおこされて、彼らを使って福音宣教がなされ続けるのです。そして患難時代に救われた者たちの中で、大変な迫害を生き延びた者たちは、肉体を持ったまま、今の我々と同じように千年王国に入っていく彼らはそこで生活をするのです。ということは千年王国の終わりまで今と同じようにこのキリストの福音が宣べ伝えられ続けるという話です。

④ 「永遠の状態？」 黙示録22：3-5

そうすると、今我々が見ている「完全なものが現われ」というのは何のことなのか。イエスが私たちを伴って地上に帰って来られた後も今と同じような働きがなされて、人々がキリストの福音を語っていくということからして、これは地上再臨の話でもない。では一体何の話なのか——。永遠の状態です。黙示録21-22章に出てくるように、千年王国が終わった後、神が新天新地をお造りになる。そしてそこにこの救いにあずかっていたすべての者たちが時代に関係なく、そこに住んで神をあがめ続けるのです。その時にはキリストの福音を宣べ伝える必要性はないのです。そこには神を信じていない者たちが存在しないからです。

黙示録22：3-5に「もはや、のろわれるものは何もない。神と小羊との御座が都の中にあって、そのしもべたちは神に仕え、神の御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の名がついている。もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらない。彼らは永遠に王である。」とあります。この新天新地において人々は何をしているのか、みことばが記しています。神を見て、神をあがめ続けるのです。ですからこの「完全なものが現われ」た時、つまりこの新天新地が訪れる時に、こういった「不完全なもの」はみんな活動をやめてしまうのだと言うのです。

(2) 「子どもっぽいことだったから」 11-12節

なぜこういう賜物が一時的なのか、永遠ではないのか二つ目の理由をパウロは記します。11節を見ると「私が子どもであったときには、子どもとして話し、子どもとして考え、子どもとして論じましたが、おとなになったときには、子どものことをやめました。」とあります。二つ目の理由として挙げているのは子どもっぽいことだったからそれをやめるのだということです。つまり大人になったら子どもの時にやっていたことをやめるのでしょうかという話をするのです。子どもだった時には当然子どもとして話していたし、子どもとして考えていたし、子どもとして論じた。でもいつまでもそれを続けるわけではない。大人になれば大人として話し、大人として考え、大人として論じるでしょう。大人になった時に子どものことをやめたのだと。もうそれを終わりにしたのだと。幼稚なことをやめたのだという話をするのです。

ある辞書によればこの「子ども」というのは無力な乳幼児の年齢の子どもではないが恐らく三、四歳くらいではないかと言われています。何歳であろうとも、子どもの時にしていたことを中学生になっても、高校生になっても、大学生になっても、社会人になっても、老人になってもやっていたらおかしいですよ。ですからパウロが言いたいのは、こういう「預言」や「知識」といった賜物は永続しない。なぜならそれらはまさに子どものようなものだ、子どもっぽいものだと。大人になったらもうそれは必要ないのだと。もう少し説明すると、パウロはこの大人と子ども、永遠の状態と地上での生活とを比較するのです。地上での生活というのはまさに子どもの生活みたいなものだ。それが証拠に私たちは知恵もなくして失敗を繰り返すのです。我々の生活を振り返って見た時に失敗が多いではないですか。例えば子どもたちの歩みを見た時に、そんなことをしたらきつとけがをすとか、そんなことすると必ずコケるとか、端から見てると気づきます。でも子どもたちはそんなこと気づかずに結果的に転んでしまって傷を負ってしまう。パウロは、我々がこの地上にいる時というのは、まさにそういう知恵もなくして失敗の連続だと言うのです。でも我々がこの新天新地に入れられる時、つまり大人になった時に、そういう子どもの時の生き方から完全に解放される。なぜならば我々は「完全なもの」になるからです。

そのことが12節に続きます。「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ています」、「鏡にぼんやり映るもの」というおもしろいことばが使われています。これは「なぞ」とか「不可解な」という意味です。銅で鏡を作って、それを一生懸命磨くことによってそこに自分みたいなのが映る。今の鏡とは全く違います。でも実はコリントの町というのは、銅製の鏡が非常に有名な町だったのです。ですからあえてパウロはそれをここに例えとして使うのです。鏡がちゃんとよく磨けていないと映っても輪郭だけでぼやとしてますよねという話です。神様の啓示が記された聖書が与えられ、それを理解するために聖霊が与えられた。またそれを解き明かすための教師が与えられた。それでいて我々の解釈には限界がある。すべての真理を正確に知ったかという、そうでないこともたくさんあります。聞いてはいても誤解しているかもしれないし、ちょうど鏡にぼんやり映るものを見ているようなものです。見ているはずなのによく見えていなかった。見ていてこれじゃないのかなと思ってもそうでなかったり。つまり見ているのだけれどもその一部しかわかってない。でもそれはいつまでも続かないというのです。

12節に「その時には顔と顔を合わせて見ることになります。」と続きます。どの時なのか、この「完全」が訪れた時です。「完全なものが現われ」た時に、私たちは「顔と顔を合わせて見ることになります」と。一体誰を見るかという、私たちの創造主である神、私たちを愛してくださったイエス様を、「顔と顔を合わせて」私たちは見るのです。アダムとエバがエデンの園にいた時に彼らは神を見て日々を過ごしていました。聖書の中に神と「顔と顔を合わせて」神を見た人たちのことが出ています。その中の何人かを紹介すると、ヤコブが神様と格闘した時の話が創世記32章に出てきます。その場所のことを「ペヌエル」と呼びました。どういう意味かという、「私は顔と顔を合わせて神を見たのに、私のいのちは救われた。」という意味です。ヤコブが神と格闘した時に神の顔を実際に見たのに自分は滅ぼされなかった、そこでその場所を「ペヌエル」とつけたと。モーセに対しても神はこう言われました。「彼とは、わたしは口と口とで語り、明らかに語って、なぞで話すことはしない。彼はまた、主の姿を仰ぎ見ている。」と。イザヤも主を見たと言っています。みことばを見た時にそういう人々がいるのです。

でもパウロが私たちに教えてくれるのは、「完全なものが現われ」た時に私たちは神と「顔と顔を合わせて見ることにな」と。確かに今私たちは知っていると言っても、ごく一部でしかありません。完全な知識を持っていない。でもその時が来ると我々は知ることになる。すごいことがこの12節の後半に書いてあるので見てください。「今、私は一部分しか知りませんが」、知っているのはごく一部だと。そのすべてを知ってはいない。その後です。「その時には」、つまり「完全なものが現われ」た時には「私が完全に知られているのと同じように」、知るといことばを「知られている」と受け身で書いてあります。誰が私のことを知っているのか——。神ですよ。しかも神があなたや私のことをどれくらい知っているのか、不完全なのかというのではなくて完全にあなたや私のことを知っておられるということでしょう？あなたは神に完全に知られているのです。神はあなたのすべてのことを知っておられるのです。あなたがどんなことを考えて、どんなことで苦しんでおられるのか、あなたの痛みも、悲しみもあなたの喜びも一部ではない、すべてのことを完全に知っている。皆さん、すごい感謝だと思いませんか？もしこの方が私たちのごく一部しか知らないとしたら、神の我々に対する知識が不完全だとしたら、我々は一々説明しなければいけません。神様、これはこういう目的でしたのですが、こういう動機だったのです。でもみことばが教えるのは神は全部わかっている、私たちは説明する必要がないと。神のあなたについての知識は完全なのです。それが私たちの神なのです。こんな私たちのすべてのことをわかっておられる。ご存じだから時においてふさわしい、必要な助けを与え続けてくださる。そしてパウロはあなたも私もこの神によって完全に知られていると言うのです。でも「完全なものが現われ」た時に「私も完全に知ることになる」、神をです。今私たちの知識は限界があるのです。すべてがわからないのです。でも神が私のことを知っておられるように、私もこの神のことを完全に知る時が来るのだという約束です。

ファニー・クロスビーは“わがを為し終えて”という曲を書きました。聖歌646番です。「わがを為し終えて、この世を離れ、彼方の御国にゆかば、輝く明け方、笑みをたたえて、主は我を迎えたまわん。我が主、我が主を、我みそばに立ちて知らん、我が主を、我が主を我、御手の傷にて知らん。」と。彼女のすばらしい希望を歌っています。その時には、私はこの私を愛してくださった主を知ることになると折り返しが訳されているのですが、直訳すれば、私は顔と顔を合わせて主を見ると。そして恵みによって救われた話を語るとなります。「完全なものが現われ」た時に、私たちが天に上がった時に私たちは主の御顔を拝してあなたの恵みによって救われたのだと、そのすばらしい神様のみわざをたたえ続けるのです。もちろん私たちは空中再臨で主にお会いするけれどもすべての者たちが、この新天新地にあつて、旧約も新約もすべての者たちが、患難時代も千年王国もすべての救われた者たちがともに主を拝して主のすばらしさをほめたたえるのです。賜物はたくさん与えられているけれども、すべてが永遠に残るわけではない。みことばが完成していない時には、このことばが本当に神のことばなのだ

いうことを証明するために、「異言」や癒し、神は特別な奇蹟をなされた。でももう聖書は完成しているし、必要ないのです。そして聖書によって、神によって私たちの生活が本当に変えられるということの証拠は奇蹟ではなく、我々なのです。私たちが生き証人です。神は確かに私たちを生まれ変わらせてくださる、こういうすばらしい約束を神は私たちに下さったのです。そしてその時にはこういう賜物はもう存在しないのです。

3. パウロの結論 13節

最後にパウロの結論が13節にあります。「こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。」と。パウロはもう一度読者たちを現実に引き戻すのです。これまでパウロはこの地上において実はこの三つのものが大切だということを改めて強調するのです。「いつまでも残るものは信仰と希望と愛」、この三つだと言うのです。でもあえてパウロはここで今まで永遠に続くものとそうでないものを比較してきました。ここでも同じことをするのです。私たちが今この地上にあって、信仰者として生きていくために必要なのは、「信仰と希望と愛」なのです。私たちはこの地上にあって、いろいろなことが日々の生活に起こってきます。でもそれらを通して私たちが主を心から信頼するように神は助け続けてくださっているのです。何にも問題がなければ、何にも試練がなければ、主を信頼しなさいと言うことは簡単です。でも私たちはいろいろな日々の生活を通して、主を信頼することを神様によって教えられているのです。時には大変難しいレッスンがあたりする。それぞれのことを完全に知っている神は、それぞれがこの大切なレッスンを学ぶためにどうしたらいいのかちゃんとご存じなのです。特別な、特注のレッスンをあなたのために与えてくださり、そしてあなたはそれを通して神を信頼することのすばらしさを学ぶのです。なぜ神様はそんな試練を通して私たちにそのことを学ぶようにしておられるのかというと、神を信頼する時に私たちは神が約束された祝福を体験するからです。私たちがどんなにこの神によって愛され、どんなにすばらしい祝福を備えてくださったのか、頭でわかっているつもりでも本当にそうなんだと、救われて本当によかったと確信するのは、私たちがこの神様を心から信頼して生きることによってです。

多くの人たちはそれを学んでおられる。孤独を感じる時に主がともにいてくださることを本当に教えられることによって、その生活を励ましていただく。ある人は全く先の希望が見えなくて、希望を失っていても、神によって希望をいただいて生きることがどんなにすばらしいのかを教えられている。問題は解決していなくても、その中に希望を見出す、その中に喜びを見出すのです。神様がいろいろなことをあなたの生活の中に与えてくださっている。それらすべてを通して神が望んでいることはこのことです。あなたがこの地上にいて本当の神様の祝福をいただきながら、最高に幸せな者として生きる。それは神だけが与えることができるのです。それをいただきながら私たちはこの地上を生きることができる。でもそのためには、その源である神様を信頼しなければいけない。だから神はあえていろいろなレッスンを皆さんに特別に与えておられる。ですから皆さん、いろいろな試練に遭遇することが頻繁にあります。神様どうかこの試練を私から取り除いてください、そんな祈りはやめなさい。かえって神を見て感謝することです。なぜなら神は失敗を犯しておられないのです。あなたを愛するがゆえにそれを与えてくださっている、感謝します、神様。どうかあなたを信頼することをもっと教えてくださいと。

確かに地上において信仰者として生きていくためには、神様に信頼することが必要です。でも皆さん、私たちが主にお会いする神が備えられたこの新しい天に招き入れられる時に、我々はまだ神様を信頼する必要があります？そんな必要はもうないのです。なぜならそこに主がおられるのです。この方とともに生きられるのです。確かに地上においては私たちはこの主に信頼して生きることが必要でした。でも主にお会いした私たちはもうその必要はないのです。だから、今私たちにとっては「信仰」も次に見る「希望」もみんな必要なのです。でもイエス様にお会いした時に、もうその「信仰」は必要ないのです。その「信仰」が私たちをゴールへと導いてくれた。

「希望」も我々の生活において必要です。なぜなら私たちの生活で全く光が見えない時があるではないですか。でも私たちがそのすべての背後におられる支配者なる神様を見た時に、その中でも「希望」を持つことができるのです。多くの信仰者たちはそうやって生きてきました。神に望みを置いたのです。神が我々の「希望」だったのです。そうして大変な中も生きてきました。多くの勇者たちが「信仰」を守り通すことによって、死を自分の身に招くかもしれない。そんな時に彼らは神を見て、その方に「希望」を置くのです。ダニエルもそうでした。拜んではならないと命じられ、それを守らないと殺されることを知っていました。でも彼は神に「希望」を置いて神を礼拝し続けるのです。私たちもいろいろなことが出てきます。今も確かにいろいろなことが周りにあります。このコロナもそうです。でも我々はそれを見ているのではない、その背後におられる神を見るのです。その時に私たちはこんなコロナでさえも神様に感謝できるのです。問題はいつコロナが終息するかではないのです。自分自身の「信仰」がそれに勝利するかです。でも私たちがイエス様にお会いする時にこの「希望」も必要ないのです。我々

の「希望」にお会いするからです。

パウロは、地上にあっていろいろな必要がある中で、一番大切なものはこの「信仰と希望と愛」だと言いました。もちろん我々は信仰者としてこの地上に生きていくためには「愛」が必要です。神を愛するゆえに我々はすべてのことをするし、神を愛するゆえに兄弟姉妹を愛していこうとするし、神を愛するゆえに神を知らない人たちにこのすばらしい神を伝えていこうとするし、確かに今の生活において言われているように「信仰」も「希望」も「愛」も必要なのです。では、「愛」も他と同じようにイエス様にお会いした時に、神にお会いした時に、天に招き入れられた時にもう必要がなくなるのかということ、いいえ、これだけではなくならないのです。我々は永遠にこの神を「愛」しながら生きるのです。だから一番優れているのです。

神はエレミヤ31：3で「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。それゆえ、わたしはあなたに、誠実を尽くし続けた。」と言います。神様の愛は一時的ではない。神様の愛は永遠の愛です。そして永遠の愛で愛してくださった神にお会いした時に我々はどうするか——。地上にいてもこの神を愛しながら歩むのですが、残念ながら不完全です。でもこの方にお会いした時に私たちは完全なものとされ、完全な「愛」をもってこの神を愛し続けていくのです。こうして我々は永遠を過ごすのです。もう「信仰」も必要でない。もう「希望」も必要でない。主にお会いしたからです。ただ残るのはこの方を愛する「愛」だけ。その「愛」をもってこの方をほめたたえながら私たちは永遠を過ごしていくのです。詩篇の著者は43：4で「私は神の祭壇、私の最も喜びとする神のみもとに行き、立琴に合わせて、あなたをほめたたえましょう。神よ。私の神よ。」と言っています。私たちの最も愛するお方にお会いでき、その方とともに永遠を過ごすことができる。

我々は例外なく、すべての信仰者に霊的賜物が与えられています。霊的賜物をいただいているがそれを主のために、また教会に仕えていないとするならば、それを不信仰と呼びます。もし霊的賜物を用いても兄弟姉妹の霊的成長のために用いていないとするなら、それを不信仰と言うのです。もし霊的賜物を兄弟姉妹の霊的成長に用いてもその動機が「愛」でないなら、それを不信仰と言うのです。私たちは神が言われたことに従う者です。どれだけの賜物を持っているか、どんな賜物を持っているかはどうでもいい。それは神がお与えになったものです。神は正しく用いなさい、しかも正しい動機を持って用いていきなさいと言っておられるのです。「愛」をもってすべてのことをしていきなさい。そのことをパウロはここでこのコリントの人々に教えたのです。

エリザベス・クエンティスという人は讃美歌321番を書きました。タイトルは“我が主イエスよ、ひたすら”です。彼女がこれを書いた時の話を読みました。1850年代、彼女は大変悲しい出来事を経験するのです。ひとりの娘を彼女は亡くし、その後しばらくしてまた別の娘を天に送っています。その中であって彼女が書いた讃美歌は「我が主イエスよ、ひたすら祈り求む 愛をば 増させたまえ 主を愛する 愛をば 愛をば」と。主に対する愛を増し加えてほしい、それが彼女の願いでした。彼女はこんなふうに書いています。「キリストをもっと愛することは最も重要であり、私の魂の絶え間ない叫びです。森の中でも床の上でも運転中でも、私は幸せで忙しい時も、そして私が悲しくて何もできない時でも私の心からのささやきはより多くの愛、より多くの愛、より多くの愛を求めて上がり続けています。」、自分の心からのささやきが上がり続けている状態、心の中からもっと神様を愛したいという思いが彼女自身を支配していた。だからこんな曲を書いたのです。もっと神様を愛したい、それは私たちの願いでもありません？永遠の愛でもって愛してくださった神様、この方を愛することができるのは我々の特権です。なぜならきょうも見てきたように、我々は永遠にそれをするのです。そして皆さん、今そのようにして歩んでおられると思います。でも我々の愛というのは不完全です。私たちは神を愛していると言いながら、それ以外のものを同じように愛していたり、ひよっとしたら神以上に愛していたり、私たちの祈りは彼女が教えてくれたような祈りであるはずだと思いませんか？もっと神を愛する者に私を変えてほしい、どうかその祈りをもってこの新しい1週間、主に従ってまいりましょう。